

# デザイン科における卒業制作

鳥取県立米子高等技術専門校 デザイン科 下田 良純

## 1. はじめに

本校は自動車整備科・OA事務科・総合建設科・キャドシステム科・デザイン科の5つの分野で構成されており、1年間(自動車整備科は2年間)という短い期間の中で、それぞれ専門分野での技能・技術の習得を行い、即戦力としての人材を社会に送り出している。

私の担当しているデザイン科では、デッサン・色彩学・構成等の基礎から、ポスター・パンフレット制作等、応用としての広告に関する知識と技能をコンピュータ(マッキントッシュ)制作を含めて身につけている。

昨年までは、訓練の中での作品を卒展として展示したり、個々での自由制作(自分で課題を決めて作品を作る)にとどまっていたが、今年度はデザイン科全体としての卒業制作(研究)を取り入れた。

本稿は、デザイン科の卒業制作までのスケジュール・制作プロセス・結果を報告するものである。

## 2. 卒業研究をするにあたって

当校は、高等技術専門校(職業訓練校)であり、他の大学や短大のように、研究室あるいは1年間という長いスパンでの卒業研究をすることは不可能である。また職業訓練校としての本分(就職のための技能・技術の習得)からみても卒業研究というカリキュラムは非常に難しいものと考えられる。

はじめに述べたとおり1年間の授業(以下「訓練」という)の中で基礎から入って、実際に作品(ポスター・パンフレット等)を作ることにより、応用を勉強している。そこでデザイン科では、卒業制作(研究)を訓練の1つとして制作することにした。

## 3. 作品とテーマの決定

卒業制作に限らず、作品を作るにはコンセプトというものが重要である。デザインをする場合、クライアント(客・取引相手)あるいはそれぞれのターゲットに合わせたデザインをする必要がある。実際にこれまでの訓練の中で、ポスターにしてもパンフレットにしても必ずコンセプトを立てて、それに沿ったデザインをするというプロセスを踏んでいる。

そこで、この原点である「コンセプトからデザインする」という枠を取り、コンセプトなしで進めると、どうなるかという研究も含めて制作した。

実際に制作する作品であるが、デザイン科の実習場にある壁をキャンバスとして壁画を描くことにした。全員で壁に絵を描いていくわけだが、今年度だけのものではなく、次の年、さらにその次へと発展させられるもの考えた。

来年につなげるには、流れというものを作っておく必要がある。そのために、まず生徒1人ひとりにスペースを割り当て、それを埋めていくことにより1つの作品(今年度)が完成する。その継続で来年へと発展することができる。

コンセプトを立てない作品づくり、「部分から全

体への展開をテーマとして 壁画の制作に着手した。

#### 4. 制作工程

平成11年度の制作工程は以下のとおりとなっている。

- ・スペースの割り当て(図1)
- ・下地処理
- ・図案作成
- ・作業(図2)

##### (1) スペースの割り当て

今年度は壁全体の3分の1程度を制作用のキャンバスとし、さらにそのキャンバスを16コマに区切り、1人分のスペースとした。テーマである「部分から全体への展開」を考え、スペースの形自体に統一感(格子状など)が出ないように、図1の形でスペースを与えた。

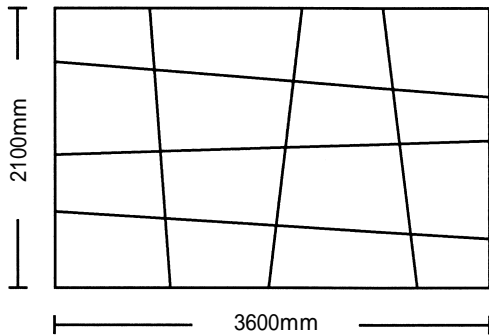


図1 スペースの割り当て

##### (2) 下地処理

作業を進めていくうえで、壁にペイントするためには下地処理が必要である。今回は屋内の壁なので、完成後に悪条件(雨・風等)に置かれることはないが、ペイントの乗りを良くする、あるいは長期に保存されるという点において、重要な工程である。今回は、アクリル絵の具で薄い色を使う場合は壁の色が出ないように白等の色で着色したり、エアブラシを使用したり、塗料をしっかりと均一な状態で壁に付着させるためにサンドペーパーをかけるなど、各自のペイント方法に合わせて下地処理を行った。

##### (3) 図案作成・作業

実際の作業としては自分のスペースのデザイン・



図2 作業(ペイント)

配色を決め、スペースからはみ出ないようにマスキングテープあるいは新聞紙等でマスキングする。あとは個々のデザインにより以下の画材を使用した。

##### <塗料>

- ・アクリル絵の具
- ・水性ペンキ
- ・ラッカースプレー
- ・水性スプレー 等

##### <画材>

- ・刷毛
- ・筆
- ・ローラー
- ・エアブラシ 等

個々のスペースに各自がペイントをしていくうえで、まずテーマである「コンセプトを立てない」「部分から全体への展開」を両立させるために、図案作成・作業という工程を併行して進めた。

何も描かれていない16コマあるスペースの1つに、まず1人目が自由にペイントをする。それに対して次の人は、16分の1描かれた中に「部分から全体」を考えて図案作成・作業という工程に入る。この繰り返しで16コマすべてを埋めていき、完成となる。

#### 5. 制作期間

卒業制作(壁画)と併行して卒業文集も同時進行で作成しており、壁画に費やされる時間は制限され

た。

ここで卒業文集作成にも少し触れておきたいと思う。文集も1人ひとりがコンピュータ(マッキントッシュ)を使い制作するが、全員の文章を打ち、流し込んでいく。さらにイラストや写真をスキャナで読み込み、文章とのバランス等を考えレイアウトし、マッキントッシュから直接プリンタで出力・製本し完成となる(使用ソフトはイラストレータ8.0およびフォトショップ5.0)。

1年間(1400時限)という短い訓練の中に、この卒業制作(壁画)を組み込んだわけだが、スケジュールとしては、2月後半から3月後半までの1ヵ月間を制作期間とした。

## 6. 卒業制作(分析)

### 6.1 作業工程を通じて

完成された16コマの壁画(図3)と、その1コマ(図4)で、テーマである「部分から全体への展開」を表す。

実際に壁画を仕上げていく工程をみて感じた点を以下にまとめた。

まず、最初に描かれた絵は16コマの1番左上のものである(図3)。ここをテーマの中の部分とし、次々と全体へ展開していった。2番目に描かれた絵は1番目の右下に位置されるが、1番目のバック・黒、黄色の絵に対し、バックを赤にし黒で線・色が塗られている。急激な変化をしない配色とデザインで調和を図っている。ペイントのタッチにしても1番目がエアブラシを使用しているのに対し、フラットな塗りに仕上げている。

同様に1人ずつペイントをしているが、各自で「部分から全体への展開」というテーマを念頭に置いて、周りとかぶらないように、また逆に差がつきすぎないように、それぞれがデザイン・配色・画材の選択等で苦労し、工夫して制作していた。

### 6.2 作品の分析

図3の作品を「部分から全体への展開」というテーマに対して以下の3点から分析してみた。



図3 卒業制作作品(全体・16コマ)



図4 卒業制作作品(部分・1コマ)

- ・テーマ
- ・デザイン(図案)
- ・色彩

#### (1) テーマの分析

「部分から全体への展開」というテーマであるが、ある1つのものがあり、次に自分がそこにものを作る、あるいは何かをしなければならない状況におかれた場合、大きく分けて3つの行動に分けることができる。1つは前のものに合わせようとする(統一を求める)、2つ目はできるだけ違うものを作るあるいは違うことをしようとする(変化を求める)、3つ目はそのどちらでもない行動である。

ここで今回重要となってくるのは、この3つ目のどちらでもないという部分である。ただ注意してもらいたいのは、どちらでもないイコール自分勝手に

自由にという意味ではなく、「部分から全体への展開」というテーマに沿ったうえでのどちらでもないという意味である。

隣り合った同士が急な変化にならず、かといって同じものにならない。全体が完成したときに調和が生まれるようなものを作ることが今回の重要なテーマである。

### (2) デザインの分析

デザインしていくうえでも、全体を考えることが重要である。部分から全体へ展開していくわけであるが、図3をみると人(人間)が描かれたものが多いのに気づく。1番目が人の顔というのがこの結果になったのか、単に今年度の生徒の個性として偏りが出たのか定かではないが、少なからず「部分と全体」ということが何らかの影響を及ぼしているといえる。

これは、同様に英語の文字についてもいえることである。画材やペイントのタッチについては、個々の個性(趣味)に分かれる傾向にあることが予想される。

### (3) 色彩の分析

テーマに沿って、一番生徒が考えていたのが配色である。普段何気なく色を塗っているが、この配色によってさまざまな効果を引き出すことができる。

例えば、コントラスト配色といって反対色(色相・明度・彩度)を組み合わせると、メリハリがありはっきりとした差を出すことができる。トーンや色相を同じものでそろえると、統一感を出すことができる。左右に激しい色がきたり同じような色がきた場合でも、どちらにも影響しない色を挟むことによって3つを調和させることができる(セパレーション配色)。その他にもさまざまな効果を生み出す配色があり、極端に言えばどういうデザインをしても、配色のみでこの「部分から全体への展開」というテーマをクリアすることが可能なのである。

実際に作品を分析してみると、写真がモノトーンなので説明が難しいが、図3で右から2列目の上3段をみると、1番上と3段目の羽の絵はいずれもオレンジで同一色となっている。そこで間にある顔の

絵(どちらにも影響しないバックが白)を入れることで調和を図っている。ただ、その右のSUCKER 2000というデザインは黒をベースにした配色なので、コントラストが強く激しい感じになっているが、部分から全体という点で考えると、その2つを組み合わせても全体の一部にすぎず、完成された16コマで調和のとれているものになればテーマに沿った配色であるといえる。

配色の中にレピテーションというものがある。これは同じ色の組み合わせを何度も繰り返すことにより、リズムのある調和を生み出す配色である。つまり、この16コマの中で1つの組み合わせに違和感があっても、全体を作っていくうえでリズムのあるものにするすることで、融和性を高めることができる。

## 7. おわりに

今回の卒業制作(研究)を通して、さまざまな反省点や収穫を得ることができた。1ヵ月間という短い期間で制作したわけだが、完成までの大まかなペースをつかむことができた。さらに、その準備期間として前もったプラン作成(生徒のテーマへの認識度や、制作に対する意欲を高めるため)の必要性も実感した。今回は壁画の完成という形で卒業制作(研究)が終わってしまったが、完成したものを分析するという過程を取り入れると、生徒自身の卒業制作への取り組みが違ってくるだろう。

いずれにしろ、「部分から全体への展開」というテーマは、もっと大きな視野でみると今回の16コマの壁画も全体の一部(つまり部分)にすぎない。この今年度の作品から、さらに展開させていき壁がすべて埋め尽くされたときに、初めてこのテーマが完結されるわけである。その時にどういう作品になっているかは完成してからの楽しみであり、それに向けての第一歩を今年度でスタートできたことは、私にとっても生徒にとっても大変意義のある卒業制作であった。

最後に、この制作を担当してくれたデザイン科の生徒諸君に、厚く感謝申し上げます。